



## 自然体験の重視

新田児童館 館長 小野 義彦

自然との触れ合いに私たちは多くの意義を見出しますが、その一つには豊富な直接経験を得ることにあります。

大人から子どもまで、いまだに多い大人向けの本やテレビゲーム・スマホゲームの映像が氾濫する中、「地域社会」は到底及び得ない、鮮明で、しかも興味を誘う情報を選択し生活に活用する必要に迫られています。

情報を生活に取り入れても、それは視覚的・間接的なものに過ぎず、体験的な場合であっても、部分的な模型やレプリカに過ぎません。「地域社会」がマスメディアの影響を越えて子どもたちに感動を与えることができるのは、行動性にあり、実際に実物に触れることの出来る具体性や直接性にあると思います。間接的課題では事実確認が不十分で、実物に接する経験が乏しい場合は、抽象的な把握がしにくいものになるでしょう。

現代は少子化に伴い、子どもが外で遊んでいる姿が少なくなり、外遊びが分からない子もいます。昔の親は子どもを泥まみれにして遊ばせ育てました。自然に溶け込み自然の中で学ぶことによって、すべての認識は五感より感じ、実物に触れ、世の中にある本物の姿に接して、自然現象や社会の仕組みを体験することが大切なことと捉えていました。

自然は生きていくための教育の場。自然から何を体得することが出来るか。自然と触れ合う意義は、その中で子どもたちが仲間と共に体力や行動力を培い、サバイバル的な学びを得る事にあると思います。子どもたちには、自然の中で身体全体を使って見いだす本物体験を積み重ねていって欲しいです。

もう一つは、現代の子どもたちにとって、遊び時間が少なくなり特定の価値観のもとに勉強を強いられ、塾や習い事等で放課後の遊びが消え去ろうとしている現状があります。昔は、子どもは遊びの中で成長し、無心になって遊ぶなかで魂を解放し、エネルギーを発散し、汗ばみ、工夫し、困難に耐え、子ども同士のあそびの中から生き方を身に付けてきました。子どもたちの遊びの質が変わってきたからこそ、自然遊びを体験させる必要性があると思うのです。

森林の中に生息する昆虫、植物、人に害を与える木々、動物の足跡から自然の営みを感じる。その環境の中で、初めて手に取るノコギリやロープ、カナヅチ、釘等を使ったワークショップに真剣に挑む子どもたちの姿がありました。昨年度、太白区坪沼地区で実施した「そあとの庭」ワークショップで見た子どもたちの普段と違った目の輝きと、思う存分自分を出して活動していた子ども本来の姿に感動しました。

今まで体験できなかったことや成し遂げることができなかったことを集団活動から体得する、自然の中に身を置くことで心が解放され相手に対し寛容になる、仲間と共に達成する喜びを味わう等、一緒に活動しなければ分からない環境に子どもたちを置く大切さを知りました。

今年も「そあとの庭」での体験が始まります。この体験を通し、子どもたちが将来、逞しくクリエイティブに生き抜いていけるよう、人生の中でもプラスになることを期待したいものです。

